昭和天皇のランチ

札幌市医師会
新札幌パウロ病院
高階（たかしな）　俊光（としみつ）

父親の墓参りに行ってきました。室蘭です。行くに当たって、埋もれていたある記憶が蘇りました。それは私が子供の頃に食べた「天勝」というお店の天丼でした。

昭和天皇は、昭和29年８月６日から23日まで北海道行幸をされました。栃木県那須の御用邸を出発し、青森駅を通り、青森港よりお召船となった青函連絡船「洞爺丸」に乗り函館港に到着、北海道各地を巡りました。天皇のお召列車は函館を発ち８月９日に室蘭本線通過となりました。本輪西から室蘭を通ることを知った人たちは一目見ようと沿線に集まりました。私はその当時４歳と１ヵ月でした。旧富士鉄（現在日本製鉄）の七門と呼ばれていた入口の前にあった踏切で、お袋や近所のおばさんたちが大勢集まってゴザを敷いて待っていました。そして天皇が通り過ぎる時に列車の窓から手を振ってくれたのを覚えています。この後に室蘭駅で下車した天皇は「天勝」というお店で天丼を召し上がりました。

その翌月の９月26日にお召船であった「洞爺丸」は台風15号により沈没し1,000人を超える多数の死者を出して、その海難惨事は史上最悪のタイタニック号に次ぐものとして歴史にその名前を刻み、戦前からあった青函トンネルの構想は一気に具体化したそうです。天皇はその知らせを受けてどう思われたのでしょうか。

私は小学校の３年（1960年、昭和35年）から４年生にかけてそろばん教室に通っていました。お袋は近くにあった室蘭信用金庫に将来勤めてくれれば申し分ない、そろばん３級を持っていれば当時は役に立つと思って習わされました。そのそろばんの昇級試験を受けるために、中島町の社宅から当時とても繁栄していた室蘭の町まで出て来ました。その際にお袋が「天勝」で天丼を食べなさいと言ってお金を持たせてくれたのです。それまで、天丼の名前も聞いたことがなく、勿論食べたことはありませんでした。その時は世の中にこんな旨いものがあるのかと子供ながら思ったものです。

父の墓参りがてら、昭和天皇が召し上がり、小学生の時食べて感動した「天勝」の天丼はどうなっているのか確かめることにしました。実に62年振りです。「天勝」は1920年、大正９年の創業で、100年を超えています。地元では知らない人はいない有名なお店です。

まずは老舗感のある店の前で記念写真です。黒地に白で大きく「天勝」と書かれたのれんを潜ってお店に入ります。お店に入って入口のレジで注文して食券を買い求め、カウンター席に案内されました。ちょうどカウンター席に座ったところで次々とレジの前にお客さんの列ができ、さらに店の外まで並んでいました。今の室蘭ではここだけは珍しく活気があります。私は特上の天丼1,500円を奮発しました。カウンター内では揚げもの専門の２人、ドンブリによそったご飯にタレをかけ揚げ物をのせる人、みそ汁などをよそう女性の計４人がいて黙々と機械のように動いています。運ばれて来た天丼は揚げ物で蓋が大きく浮きはみ出ていました。タレはウナギのタレのように甘くなく絶妙な味で、ご飯とタレのかけ具合のコラボもばっちりで、何とも言えない美味しさを醸し出していました。天ぷらは一度タレに浸けるので、サクッとではなくしっとりとしなっています。食材は大きなエビ４つとイカなどです。天皇も召し上がった天丼はやはり美味かったと期待以上の味でした。

そろばんは３級の試験に合格して今度は２級かと、そのころになると頭の中にそろばんが見え始め、先生の読み上げ暗算もできるようになっていました。自分でも面白いと自信がつきかけてきたころ、お袋から３級をとったからもういいと言われて辞めさせられました。それ以降「天勝」に行ったこともありませんでした。

父親は亡くなり、お袋は老人施設に入っている現在、室蘭には家もなく親戚もみんな年を取ったり亡くなったりしています。今回の墓参りでは蘇った記憶に誘われて昭和天星が召し上がったランチはもっと高級であったかもしれませんが、同じランチを食べてふる里を後にしました。

参考記事：河原崎暢　洞爺丸事故の言えない闇　北海道医報　平成28年９月１日　第1176号